
さよならは言えない

九条 眠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならは言えない

【Nコード】

N2740Y

【作者名】

九条 眠

【あらすじ】

学部内で日本人の中に混じる外人カップル二人。

しかし、二人の別れは、死だった。

それでも二人の思いは二人をさよならと言わなくてもいい関係にした。

出会い、別れ、再会、の物語。

愛しいければ愛しいほど、別れはつらいものなのです。
ならば、前もってその準備をしておけば、悲しくなんてないのでは？

バド・グリスク・・・それが彼の名前。

日本人ではなかったが、日本語が堪能で、とても紳士だった。
彼と出会ったのは私が大学生の時。

実は私も日本人ではなかった。

名前はレド・ステイラ。彼よりは日本語がうまくなかったが、学部内では私たち二人以外には外国人はいなかったから、よく二人で一緒にいた。

お似合いだと冷やかされたりもした。

そんな日常が暖かくて、愛しかった。

いつしか私たち二人が好き合っているということは当然のようになっていた。

だけど、幸せは長く続かなかった。

あの日はちょうど雨。

ジトジトしてとても気持ちがいっぱいだった。

遠くでいつものように笑顔のバドが見えた。

曇りのない笑顔は相変わらず。

いつみても美しかった。

そんな彼が自分の恋人だということが正直不安だった。

彼は私にとって幸せなのだろうか・・・

その質問に対しての答えはYESつまり幸せらしい。

ひよろつとして、にこやかで、さわやかな彼が大好きだった。

彼と二人で歩くと私は妹にみられることもあった。

友達にそう言われたとき、バドは決まってこう言った。

「レドはいつも困った顔をしているよ。でもその言葉をかけると一層困った顔にする。僕の彼女を困らせないでおくれよ。」

さわやかなほほえみ。みんなで・・・大勢で笑ったことがなかった私にはとても暖かく感じた。

だけど、終わりは突然に・・・

帰り道、バドは研究資料を書き上げなくてはならなかった。

その日は雨のせいでも気温が低かった。

だから、バドは私に、先にお帰りといった。

大学の三年。

この時は同棲をしていた。いつでも一緒だった。

しかし、暗い帰り道、後ろから誰かが駆けてきた。

「バド？」

そういつて振り向いた瞬間。

喉にしょっぱいものを一気に飲みこんだような、氷が一筋突き刺さるような感覚に襲われた。

傍からみればそうではない。

頸動脈をバツサリ切られた。

犯人は私と同じぐらい、もしくはもう少し上の女性だった。

彼女は言った。

「バドさんに触らないで・・・汚れた身の上の分際で。」

私はもちろんこの言葉をかけられたとき、すでに死んでいた。

私の死体は1時間もたたないうちに大学から帰ってくる途中のバドに発見された。

大学内にいたアリバイがあること、雨で血がかなりの広範囲まで達していたため、彼が大学内にいたときに起きた事件だと断定された。

それは当然だ。殺したのは女性なのだから。

一番愛しい彼にさよならを言えなかったのには悲しみを覚えた。

そして、彼が悲しみと怒りに狂うのを見て、さよならが言いたくなかった。

だけど、ある日、私を連れていくといって雛希^{ひなぎ} 光世^{みつよ}という少年が来た。

天使なのか、悪魔なのか、それは分からないけど、とにかく嫌だといった。

そしたら嫌でもいいから来なさいと言われた。

嫌でもいいわけない。

そう思ったけど、なぜかこれ以上ここに居られないと思った。

それで彼について行った。

広い部屋が与えられた。

今までに見たことのないような、絹のじゅうたんに、天蓋つきのベッド、大きな時計。

しかし、すべて二人分だった。

二人用の部屋に、一人で一体どれぐらいの期間いただろう？

ある日、光世が入ってきた。

「レドさんに素敵な贈り物ですよ」

そういつて今までもくだらない服やらなんやらをよこしてきた。

こんかいだってそうだろう、そう思ったとき部屋に入ってきた服の入った箱を持ってきた人物に思わず飛びついてしまった。

「バド・・・」

彼はバドだった。

「服が落ちてしまうよ。レド。」

いつものようにほえむバドに涙を流した。あつたかくてうれしかった。

こうして私たちは、以前の暖かい日々と同じようにさよならが言えない関係に戻った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2740y/>

さよならは言えない

2011年11月6日11時14分発行